

Anomalous 楕円曲線の離散対数問題の解法アルゴリズムについて

An algorithm for solving the discrete logarithm problem of anomalous elliptic curves

○若林和希¹

Kazuki Wakabayashi

Abstract: Using an idea inspired by the so-called Fermat quotient on \mathbb{F}_p , we show a polynomial-time algorithm to solve the elliptic curve discrete logarithm problem for anomalous elliptic curves.

\mathbb{F}_p におけるフェルマー商というのを導入すると、離散対数問題が早く解けることを基として、楕円曲線上の離散対数問題に応用したのが本稿の主定理 (定理 8) である。

1. Anomalous 楕円曲線

$p \geq 5$ を素数, \mathbb{F}_p を位数 p の有限体, \mathbb{Z}_p を p 進整数環, \mathbb{Q}_p を p 進数体とする。

定義 1. \mathbb{F}_p 上の楕円曲線 $\tilde{E} : y^2 = x^3 + \tilde{a}_4x + \tilde{a}_6$ が $\#\tilde{E}(\mathbb{F}_p) = p$ を満たすとき \tilde{E} を **Anomalous** という。また, $a_i \pmod{p} \equiv \tilde{a}_i$ となるように $a_i \in \mathbb{Z}$ を選び

$$E : y^2 = x^3 + a_4x + a_6 \quad (1)$$

と定義する。以降, \tilde{E} は *anomalous* 楕円曲線とする。

2. 離散対数問題で扱う写像の紹介および証明

\mathbb{P}^2 を二次元射影空間として π を $\mathbb{P}^2(\mathbb{Q}_p)$ から $\mathbb{P}^2(\mathbb{F}_p)$ への法 p の還元写像 (reduction map) とする。これは $E(\mathbb{Q}_p)$ から $E(\mathbb{F}_p)$ への群準同型写像となる。 \mathcal{E} を E の形式群として λ_E を以下の写像の合成とする。

$$\lambda_E : \tilde{E}(\mathbb{F}_p) \xrightarrow{u} E(\mathbb{Q}_p) \xrightarrow{h_p} \ker \pi \xrightarrow{\psi} \mathcal{E}(p\mathbb{Z}_p) \xrightarrow{\log_{\mathcal{E}}} p\mathbb{Z}_p \xrightarrow{\text{mod } p^2} p\mathbb{Z}_p/p^2\mathbb{Z}_p \cong \mathbb{F}_p \quad (2)$$

ここで $\log_{\mathcal{E}}$ は \mathcal{E} の形式対数で, $\psi(x : y : z) := \frac{x}{y}$, h_p を p 倍写像, u を $\tilde{E}(\mathbb{F}_p)$ から $E(\mathbb{Q}_p)$ への持ち上げ (ヘンゼルの補題より存在) とする。 λ_E は $\tilde{E}(\mathbb{F}_p)$ から \mathbb{F}_p への群準同型写像となる。特に \tilde{E} が *anomalous* であれば $|\tilde{E}(\mathbb{F}_p)| = |\mathbb{F}_p| = p$ なので零写像または同型写像のいずれかになる。

定理 2. λ_E を $\alpha \in \tilde{E}(\mathbb{F}_p) - \{\tilde{\mathcal{O}}\}$ とする。 $A \in E(\mathbb{Z}_p)$ を $\pi(A) = \alpha$ を満たす点とする。 $nA \neq \mathcal{O}$ となる $n \in \mathbb{N}$ に対して $nA = (x_n, y_n)$ とする。このとき以下が成り立つ。

- (i) $1 \leq n < p \Rightarrow nA \in E(\mathbb{Z}_p) - \{\mathcal{O}\}$
- (ii) $1 \leq n < m < p$ かつ $n+m \neq p \Rightarrow x_n \not\equiv x_m \pmod{p}$
- (iii) 特に λ_E が零写像でなければ

$$\lambda_E(\alpha) \equiv -\frac{x_{p-1}-x_1}{p(y_{p-1}-y_1)} \pmod{p}$$

1: 日大理工・院(前)・数学

Proof. (i) : \tilde{E} が *anomalous* より $nA \neq \mathcal{O}$. $n = 1$ のときは仮定の一部なので, まず $n = 2$ を考える. $n = 2$ を考えると法 p で $y_1 \not\equiv 0$ なので E の群演算より

$$x_2 = c_2^2 - 2x_1, y_2 = -c_2x_2 - d_2 \quad (3)$$

$$c_2 = \frac{3x_1^2 + a_4}{2y_1}, d_2 = \frac{-x_1^3 + a_4x_1 + 2a_6}{2y_1}. \quad (4)$$

$c_2, d_2 \in \mathbb{Z}_p$ となり $x_2, y_2 \in \mathbb{Z}_p$.

$3 \leq n < p$ は n の帰納法を用いて示す. $A, (n-1)A \in E(\mathbb{Z}_p) - \{\mathcal{O}\}$ とする. $x_{n-1} \equiv x_1$ を仮定すると $\pi(A) = \pm\pi((n-1)A)$ となり $n\alpha = \tilde{\mathcal{O}}$ または $(n-2)\alpha = \tilde{\mathcal{O}}$ となり \tilde{E} が *anomalous* より $\alpha = \tilde{\mathcal{O}}$ になってしまう. よって法 p で $x_{n-1} \not\equiv x_1$ である. よって $x_{n-1} - x_1 \in \mathbb{Z}_p^\times$ であり, E の群演算より

$$x_n = c_n^2 - x_1 - x_{n-1} \quad (5)$$

$$y_n = -c_n^3 + c_n(x_1 + x_{n-1}) - d_n \quad (6)$$

$$c_n = \frac{y_{n-1} - y_1}{x_{n-1} - x_1}, d_n = y_1 - x_1c_n \quad (7)$$

$c_n, d_n \in \mathbb{Z}_p$ より $x_n, y_n \in \mathbb{Z}_p$, 即ち $nA \in E(\mathbb{Z}_p)$.

(ii) : $x_n \equiv x_m$ を仮定する. 定理 2(i) より $nA, mA \in E(\mathbb{Z}_p) - \{\mathcal{O}\}$ なので $\pi(nA) = \pm\pi(mA)$ となる. つまり $(m \pm n)\alpha = \tilde{\mathcal{O}}$ であるが \tilde{E} が *anomalous* より $\alpha = \tilde{\mathcal{O}}$ となり矛盾.

(iii) : もし $pA = \mathcal{O}$ であれば $\lambda_E(\alpha) = \pmod{p^2} \circ \log_{\mathcal{E}} \circ \psi(\mathcal{O}) = 0$ となり λ_E が零写像でないことに矛盾するので $pA \neq \mathcal{O}$. ここで (5), (6) を $n = p$ に対して考える. $pA = (x_p, y_p)$ とすると $\pi(pA) = \tilde{\mathcal{O}}$ であるので楕円曲線の有理点の性質より $\text{ord}_p y_p < 0$ かつ $\text{ord}_p x_p > \text{ord}_p y_p$ が成り立つ. 定理 2(i) より $A, (p-1)A \in E(\mathbb{Z}_p)$ である. ここで $s := \text{ord}_p c_p$ とおく. $s \geq 0$ なら $c_p \in \mathbb{Z}_p, d_p \in \mathbb{Z}_p, y_p \in \mathbb{Z}_p$ となり矛盾. よって $s < 0$ である. すると (5) より $\text{ord}_p x_p = 2s$ であるので $\text{ord}_p d_p \geq \text{ord}_p(c_p) = s$ より, (6) から $\text{ord}_p y_p = 3s$. つまり $\text{ord}_p \psi(pA) = -s > 0$. 一方, $\log_{\mathcal{E}}$ は同型, $\lambda(\alpha) \neq 0$ より $-s < 2$, 即ち $s = -1$. このことから $\frac{x_p}{py_p} \in \mathbb{Z}_p^\times, \lambda_E(\alpha) = \frac{x_p}{py_p} \pmod{p}$ とわかる. \tilde{E} が *anomalous* より $\pi(pA) = \tilde{\mathcal{O}}$, 即ち $\pi((p-1)A) = -\pi(A)$ なので法 p で $y_{p-1} \equiv -y_1$. よって $y_{p-1} - y_1 \equiv$

$-2y_1 \not\equiv 0$ なので $y_{p-1} - y_1 \in \mathbb{Z}_p^\times$. また $\text{ord}_p c_p = -1$, (7) を合わせると $\frac{x_{p-1} - x_1}{p} \in \mathbb{Z}_p^\times$ である. $pc_p \in \mathbb{Z}_p^\times$ なので (5), (6) より, 法 p で $p^2 x_p \equiv (pc_p)^2, p^3 y_p \equiv -(pc_p)^3$ より

$$\lambda_E(\alpha) = \frac{(pc_p)^2 \pmod p}{-(pc_p)^3 \pmod p} = \frac{x_1 - x_{p-1}}{p(y_{p-1} - y_1)} \pmod p. \quad (8)$$

3. Anomalous 楕円曲線の離散対数問題

群 G , $\alpha \in G$ を有限位数 h の元とする. α で生成された巡回群 $\langle \alpha \rangle$, $\beta \in \langle \alpha \rangle$ に対し, ある $0 \leq n \leq h - 1$ に対して $\beta = n\alpha$ が成り立つ. この n を実際に求めることを G における離散対数問題という. 本稿では, 前節の写像を利用して Anomalous 楕円曲線の離散対数問題が多項式時間で解けることを示す.

定義 3 (時間計算量). ある定数 C が存在して十分大きな n に対して $f(n) \leq Cg(n)$ が成り立つとき $f(n)$ は $\mathbf{O}(g(n))$ と書く. あるアルゴリズムに対しての処理時間の計算量を時間計算量といい, 多項式時間で解けるとは, データ量 n に対して自然数 k が存在して $\mathbf{O}(n^k)$ となることをいう.

注意 4. \mathbb{F}_p のデータ量は $\log p$ である. 足し算, 引き算の計算量を基準として考えると, 掛け算は足し算を最大 $\log p$ 回行うと捉えれば $\mathbf{O}(\log p)$ となる. 割り算はユークリッドの互除法で $\log p$ 回の掛け算が必要となるので $\mathbf{O}((\log p)^2)$ となる. 本稿では, anomalous 楕円曲線の離散対数問題が時間計算量 $\mathbf{O}((\log p)^k)$ であることを示す ($k = 3$ でよい).

定理 5. $\alpha := (s, t) \in \tilde{E}(\mathbb{F}_p) - \{\mathcal{O}\}$ に対して以下の手順は $\lambda(\alpha)$ を時間計算量 $\mathbf{O}((\log p)^3)$ で計算する.

(i) $X_1 \pmod p = s, Y_1 \pmod p = t$ となる $A := (X_1, Y_1) \in E(\mathbb{Z}/p^2\mathbb{Z})$ を見つける.

(ii) $(X_{p-1}, Y_{p-1}) := (p-1)A \in E(\mathbb{Z}/p^2\mathbb{Z})$ を楕円曲線の群演算を用いて求める.

(iii) $X_{p-1} \not\equiv X_1 \pmod{p^2}$ であれば, $\lambda(\alpha)$ は

$$-\left(\frac{X_{p-1} - X_1}{p} \pmod p\right)(Y_{p-1} - Y_1 \pmod p)^{-1}. \quad (9)$$

$X_{p-1} \not\equiv X_1 \pmod{p^2}$ なら $\lambda(\alpha) = 0$ となる.

Proof. (i) を行うために $X_1, y \in \mathbb{Z}/p^2\mathbb{Z}$ を法 p で $X_1 \equiv s, y \equiv t$ となるようにとり, 以下の方程式を満たすように w を求める.

$$\begin{aligned} (y + pw)^2 &\equiv X_1^3 + a_4 X_1 + a_6 \pmod{p^2} \\ 2pwy &\equiv X_1^3 + a_4 X_1 + a_6 - y^2 \pmod{p^2} \\ w &\equiv \frac{1}{2t} \frac{X_1^3 + a_4 X_1 + a_6 - y^2}{p} \pmod p \end{aligned} \quad (10)$$

法 p で $t \not\equiv 0$, p は奇素数より $2t$ の逆元は一意的に存在する. また (1) より法 p で $X_1^3 + a_4 X_1 + a_6 - y^2 \equiv 0$ なの

で $\frac{X_1^3 + a_4 X_1 + a_6 - y^2}{p} \in \mathbb{F}_p$ である. 以上より $w \in \mathbb{F}_p$ は一意的に定まる. よって $Y_1 := y + pw$ とすることで (10) より $A = (X_1, Y_1)$ が $E(\mathbb{Z}/p^2\mathbb{Z})$ 上の点になる. (ii) で法 p^2 上で $(p-1)A$ を求めるには $\mathbb{Z}/p^2\mathbb{Z}$ の加減乗, 乗法群 $(\mathbb{Z}/p^2\mathbb{Z})^\times$ での逆元計算がある. また λ_E が零写像でなければ定理 2(iii) より法 p^2 で $X_{p-1} \not\equiv X_1$ であり, $\lambda_E(\alpha)$ も定理 2(iii) から求まる. $X_{p-1} \equiv X_1 \pmod{p^2}$ なら $\frac{X_{p-1} - X_1}{p} \notin \mathbb{Z}_p^\times$ より定理 2(iii) より λ_E は零写像となる.

(i), (iii) の計算に含まれる $\mathbb{Z}/p^2\mathbb{Z}$ の演算の数は p, \tilde{E} に依らない. (ii) では楕円曲線上の足し算を高々 $\log p$ 回行うので $\mathbf{O}(\log p)$ 回の $\mathbb{Z}/p^2\mathbb{Z}$ の演算がいる. 注意 4 より時間計算量 $\mathbf{O}((\log p)^3)$ となる. \square

次の定理は, \tilde{E} の canonical lift の存在と, その λ_E が零写像の時に満たす j 不変量の性質から導かれる.

定理 6 ([2]). (1) において $a_4, a_6 \in \mathbb{Z}$ とし, E' を

$$E': \begin{cases} y^2 = x^3 + px + a_6 & (\tilde{a}_4 = 0) \\ y^2 = x^3 + a_4 x + p & (\tilde{a}_6 = 0) \\ y^2 = x^3 + (a_4 + p)x + a_6 & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

と定義する. ここで $0 \leq a_4 < p^2, 0 \leq a_6 < p^2$ かつ λ_E が零写像と仮定すると $\lambda_{E'}$ は零写像ではない.

注意 7. $\tilde{E}' = \tilde{E}$ より E' も anomalous 楕円曲線となる.

定理 8 ([1]). $\tilde{E}(\mathbb{F}_p)$ 上の離散対数問題は時間計算量 $\mathbf{O}((\log p)^3)$ で解くことができる.

Proof. $\alpha, \beta \in \tilde{E}(\mathbb{F}_p) - \{\mathcal{O}\}$ とする. \tilde{E} が anomalous より, $\beta = n\alpha$ となる自然数 $n < p$ が存在する. (1) において $0 \leq a_4, a_6 < p^2$ ととる. もし, λ_E が零写像なら定理 6 の $\lambda_{E'}$ が零写像でない. このときの時間計算量は $\lambda_E(\alpha) = 0$ かを確かめる必要があるので, 定理 5 より $\mathbf{O}((\log p)^3)$ である. λ が零写像にならない方を E'' と書くことにすると, $\lambda_{E''}$ は準同型なので, $\lambda_{E''}(\beta) = n\lambda_{E''}(\alpha)$ が成り立ち, $n = \frac{\lambda_{E''}(\beta)}{\lambda_{E''}(\alpha)}$. この計算量も定理 5 より $\mathbf{O}((\log p)^3)$ である. \square

4. 参考文献

- [1] T. Satoh and K. Araki: "Fermat quotients and the polynomial time discrete log algorithm for anomalous elliptic curves", Comment. Math. Univ. Sancti Pauli, 47 (1998), no.1, 81-92.
- [2] T. Satoh and K. Araki: "Errata to the paper: Fermat quotients and the polynomial time discrete log algorithm for anomalous elliptic curves", Comment. Math. Univ. Sancti Pauli, 48 (1999), no.2, 211-213.